



山の手
二

山の手

中村俊定文庫
文庫 18
46
2



中村侯定之庫

山之井夏部

梅の文庫

紙負集

更衣

夏衣 秋衣 冬衣 春衣

あつらひぬ ちを

りぬき

ころもかへる宮中前くれ
御將衣束清殿の御帳のり
びくまをて夏衣取らぬひ
みへくきぬゆるとるれ
くぬ御もろふハ又衣くれ
とくもきぬ位にもまへに
やあともとり。又花衣ぬ
きうへてらるるもた
つらもきと夏衣きりゆ

ふじもいひ地志も標の
衣の。いさるわく舞も衣之
とらと志の

位より女御とらふ衣外
夜をそわらやき金やう衣之
春と夜とあり何せいれ
えいふあせらるる此衣か常倫
衣柳より海おし加ういふ言
ちうつしもろをわね衣之
ぬいさる春と夜と舞了即稔

灌佛

卯月八日ハスる嵐昆園よ

て徳生一たまふ海時夫龍
くづりそあそきい信よ
何ふせまりあ一をあおふ
日るおん徳と残るうづ
あやうらにと是とをこふ
ふれて御守師又又其心
あそきくまの事なると
何り一とあり又きうふ
躑躅標あど何ま入たの
はきりつらさの彼花園れ
うきまをさふよ一と
るやう残るふやれ餅はく
一あといひあせり

仙もあはれふもあはれなりし

卯花 卯花月夜 卯花衣
川をひらき 雲をひらき

卯花の香 花根の香

卯花ハ波りしと見えしとて
花のらしと花かともいひ果
とまたのわれあともいひり
はがめる残る月れ花と
いひらりし花を月能り
やとも見えあはれとぬら
きのむい色くくりにさく
されん花の香もさしと
ことさしとあはれとさし

月雪に思ふせんと雪月花
一夜ふりるとともいひり
雪月花一夜に思ふ卯花
うはあはれかぞえあはれり
卯花乃思ふらりしあはれ

新樹 夜こらち 木れはし
何となく 結露 志るる

夜こらちの志りに入る
えいやく志けらあどいひ
美珠りりしりあてさる
目のらもろくともいひり
すべて夜山乃志げとは
日志めとたがまれはしる

ぬももしんばよひるれー
仙人も乃のどわうさじ
あひまきぶ物ふるせいこど
もく。野んかひりしそ染ハ
あしぬやうにひあしゆ
夜心ハ目乃らとら成きんあは

牡丹

廿日草・あつこくさ
あつりさくわん

志やん
あつんハ重衝の形あもた
とへ。夏房れ名さともよ粉。
何うき縁のかここんせあど
あまのひりけ。様うさ

のとびまわつるんぞん福せ
あきれうら福ありわらさ
さ海なると志のうさあつこ
ふハ花忠王ともてんや。
牡丹ハむの富まなれ地
ともひり

あつんむに福あることよも夏房
とあつり信やたもの花の王気
帝風乃縁をほめたり
けりり。あつせよと
人れりりあれん
あつんそわわあつれん

沢沼八橋

杜若

かきほづいといふり
 流あはく。は葉乃又ととと
 がわねむれまをかあつらる。
 むらりにゆふや極はつる
 ぶどむりつる。浅沢小野
 みもよもなれと花業平
 のうらむとめさくもよと河
 此は地無道ふらひひあつり
 阿ふきもねむれまをかあつらる
 九のうもにさくや八橋は杜若正式
 名神のうらむもねむれまをかあつらる

い葉れ少くがんさくかやな花良保

郭公

山やうきえ 毛をれさく
うらむ ありさく

とらさくあく 名葉かや極あはく
 夢をまのまねまびり地
 うらして立花乃けり。
 からさくまあさくを
 と海。うらうらなれ
 ととに日さく。東次
 のうらわりの海。一夜はら
 にきくぬんとまを云乃
 とか。あふくとも山麓
 ちくきくきくさくかあつらる

けいあしにせられつじ
 さに金瓶王乃出世り
 うくべんぞれ物りあも
 ぶきふ又ぶきには福ぶ
 とふあくととらうとさ
 まざれり名れるあど
 毛ひひこそあま日と
 少りさうふき。月夜ハ
 こいのあさかやくれと毛
 りひ。程中そつひたくと。不
 如^{がま}あともあくりつけ。
 地獄^{ぢごく}りすひとと。音たふ
 かいこにあがれとものふ

けいあしにせられつじ
 さに金瓶王乃出世り
 うくべんぞれ物りあも
 ぶきふ又ぶきには福ぶ
 とふあくととらうとさ
 まざれり名れるあど
 毛ひひこそあま日と
 少りさうふき。月夜ハ
 こいのあさかやくれと毛
 りひ。程中そつひたくと。不
 如^{がま}あともあくりつけ。
 地獄^{ぢごく}りすひとと。音たふ
 かいこにあがれとものふ

けいあしにせられつじ
 さに金瓶王乃出世り
 うくべんぞれ物りあも
 ぶきふ又ぶきには福ぶ
 とふあくととらうとさ
 まざれり名れるあど
 毛ひひこそあま日と
 少りさうふき。月夜ハ
 こいのあさかやくれと毛
 りひ。程中そつひたくと。不
 如^{がま}あともあくりつけ。
 地獄^{ぢごく}りすひとと。音たふ
 かいこにあがれとものふ

出乃志乃初々々之めけ部么
 加者たをなやりやせん子祝
 あくは合はうくいくよ部么
 又音うく唱やとひふやま氏
 乃めち子どもうとまけ子祝宗澄
 づぐく久乃長くふ部么也花
 きあめあまきとてすめ何も言
 志神文法系

むした名やど紀松乃きと和同
 とちかやあやらねと子祝同
 こととち風花六かくおれ子祝宗
 部二發やうりあひ録うりご和同
 一發ハはげと物うほと部宗和

又音お通とそあことち氏
 あしの子他ま始つとこし
 くら二つあどハ始く加り
 毛ゆしつと。なへてうく
 世にもつひふるれん。うち
 実耳あもとまらつくと
 或人のひろしつと。ゆし。
 予ににくさねと好まん
 毛よりくぬいきあらうり
 此乃りりはる毛むねあり
 一もや

葵
 ちる葵乃ああひ ちるはらさ
 ちる葵乃こちあひ けん葵

何れひの海氏乃若れ必に
 かせ車あらしひ物のま
 乃沙汰をとりひむ。むねよ
 うあしあられつりあは
 うくわしとまやわ
 とりかひとまやわし。
 又昔爰れ告ありしか
 乃三つれの目人あひ
 桂のうづつあし
 何れとあしつらあも
 とりかひ乃社目あ
 何れとあしつらあも
 何れとあしつらあも

ちやうあどにけりせ
 何れとあしつらあも
 物乃けあしつらあも
 是れとあしつらあも
 系 ありいまる 祇園

卯辰と乃卯乃日あり
 乃系るれど八系九條の
 うらこととらあし
 何れとあしつらあも
 何れとあしつらあも
 何れとあしつらあも
 何れとあしつらあも

とそちつる義式なるとい
なる

人乃坐^ざあふり。縹^{いん}の
か山松^{さんしょう}あどれ氣^き又^{また}人
でんじ約^{やく}れと

いあり山^{さん}あつりも庭^{てい}はく^くし^し也^や盡^{じん}
今宮^{いまみや}志^し系^{けい}禊^{けい}ハ^ハさ^さ此^{こゝ}は^は九^く日^{にち}
たり^{たり}一^一か^かど^どと^と神^{かみ}ハ^ハま^ま
祓^{はら}が^があ^あり^り一^一と^と近^{ちか}は^は比^ひ
より^{より}十^{じゅう}又^{また}日^{にち}あ^あら^ら約^{やく}る。
此^{こゝ}鉾^{こほり}指^{さし}は^はり^り祓^{はら}あ^あじ^じも
何^{なに}か^かる。是^{こゝ}ハ^ハろ^ろれ^れと^とも^もや
と^とに^にう^うり^りせ^せ世^よ中^{ちゆう}さ^さか^かが

かりけるに。じくあふり
歸^{かへ}り^りや^や一^一ち^ち定^{さだ}め^めら^らる。
菟^う原^{げん}を^を能^よく^くう^うと^となり
つ。何^{なに}く^くあ^ある^るこ^こも^もま^まう^う
海^{うみ}さ^さの^の産^{うぶ}ま^まけ^ける^る也^や。
され^{され}も^も来^き乃^の世^よに^にも^もか^かく^く親^{おや}
わ^わう^うと^とれ^れと^とも^もは^はら^らぶ
や^やあ^あゆ^ゆる^るん^んき^きり^りと^とも^もや

いまこ^こや^や乃^の師^しあ^あつ^つり^りれ^れ目
まつ^{まつ}も^もる^るや^や皆^{みな}藤^{ふじ}氏^し子^この^の託^{たく}持^ぢ
祇^ぎ園^{えん}と^とい^いふ^ふ山^{さん}鉾^{こほり}乃^の一^一と^とも^もき^き。
志^し敷^{しき}子^これ^れひ^ひか^かき^きり^りあ^あか^かん
こ^こわ^わこ^こ乃^の師^しあ^あつ^つり^りれ^れ目^目山^{さん}も^も

何いふりあつる月やこの
詠め又スろくしやくれ
あががさくれろくしやくれ
ける^{ケイ}國乃さ海つるさ
れろくしひき新式の志き
次第あどすんで七日十
日乃作はどもちけて
ひびごろそまろくしひき
あむろくしひて。あががら
り祇園志とさふゆる
で色ろくしかるまろくと
あん
月やこのあつる月やこの

祇園志や二あく一対あつま
祇事ハあつる乃たろくしひ
まろくしひれ末山の奥乃室
あもろくしひてろくしひ
ゆる。されそあろくしひ
法式ろくしひ。いまそく
ろくしひに。ろくしひ又あつる
れよろくしひあ。そろくしひ
乃因よそあろくしひゆるか
ろくしひ。志あ。ろくしひ
ろくしひあつる地あつし

夏草花
芍薬 美人草
一八射下 雁雛

鉄線下野 茅子花 百合
 芍薬の鉄を忘ゆきな
 花の何れも地を我へて
 けしひ鉄線花のまへへて
 とも何やうなるふんふん又
 酢やく齋やくおごもきて
 けり。美人草はとうらわれ
 所まもとやもたたらあり。
 系枕あへて見んやとと
 けしひ虞氏うけうらむら
 病つらふぞんよ手おび
 丁れあいにやうにもけしひ
 見るにやうんの花は虎狼

乃敷もめそのべーとと
 志やがまうにともびこれり
 とともけしひゆへー
 芍薬にけしひ鉄線そよ風の風
 こそおのらうまをれ芍薬
 けしひ鉄線の人れ真のよ
 夏あつらゆる一八の花がふん
 十月のけしひ地うらむら
 けしひも花に下野なるけしひ
 てけしひの花火乃むとと
 けしひあー風はやもりう
 けしひもけしひけしひとと
 けしひととけしひとと

志約

くせんの花火はあつひふか
るのさげもや所こつせんを漢
腐継がひかりあまひひけし
絵師乃名にもひむけ又
達たの服たひあまひひけし
かふひとて甲からさし
えんともとふ
かゝ絵もやふとがんひの世

芥子花

うゑ 袋 子重

まゝの酒とをいれさる家
ことともよせ。かたりつる

世せ話をもしひ又消す詞
にもろへてとりつるん
乃つちのこに髪かみせし
うる城しろうらうらと
るい花のちりしる流乃
似にこればかり。是もさ
はるぬるへきまや

つる門かどままうらう。緋あか紫むら白しろの
芥子乃花かニにととささせ

あひひりる

洋よう紙しやききここここ此花衣このはなえ

百合

さゆり ねゆり 花ゆり
さゆり 車ゆり

揺りこむる乃をさそもあせ
ゆりこにゆくるあそせ人
てもいひ又車ゆりれ花
のわがりそもそそわし
鬼百合れゆりあ散そも
いひこそね

惟ゆりい美人あそわの女郎

若竹 ころんか すくろ子
ふるけり川けり

あらくえらく まるけ

あひひり 脱破りりきき

とろけいふ年をらり

とろそとせけりあがる

とそいひさひ乃みいあふ

かす梅をぬれくろも竹

る乃角もともうごひ

みやがとけくあらくれいあ

大い竹乃世はぶあどそ

いひけりれをか竹燈竹

のあふはあくこさ

と求めゆらん

人る乃あねでまうけあを水

すねたにたけり二寸わし水

女子竹乃あつたあそわす好こ

あや舟あそいふあつたあそわ
款けの子とあそわあ月雲

つらひやとせ八くやぬらうら
竹の子やいり竹るれ鳥の角二悪

橋 橋とこよれ 柀子の花
柀のむら

うらぶれよじりーれ神乃
うりのとよむるりかあ
あにぎーうとこよりー
むりイ香葉りしめに
かうり曲まう洞れあるる
あとうらとやとん
たら花かかりをめで
きふ物あもあうへゆひ
さうまぬと太刀り

そんゆー又こえんむさへ
とのさひんそくそー
徳もろえ兄公乃性氏にもたうり
花とこもうらぐーさる
とさひあをせそーあ
うー乃ぶれかさらあも
ひひりゆへー
うら花さひさうれぬひか
乃むゆ茶もうならむ乃昔昔
門と知あはるもかじれむ感
うらや政伝具乃よ
ニさるれ橋がなむらるる

五月雨

はつり 梅乃海
庭の海

あまふれおれへちるると
ありし道ふ様老とあり。
こやこの文室も海中の
龍文陣くと何やーまれ
庭の松とりろく沖の
藻よあがひ井のうられ
極と大海とあり。ちろく
川も大井川と何びき
浪浪と地よらんとやうふ
その波も形をひかえくと
あふんぐへられおもわん

うりはぐくいていなむ
ひるん

五月雨、大海とるや井様
らまふや山雲の巻とるん
さみふれや鼓の漉のあやぐ
五月雨のそよもふんぬすこの山
らまふれや晴るや乾むつ雨はな
帝釈やぐさぐれろこの旗を登

五月又日

湯水 ちまきいんま
ちやね根合 水き根

ちまきいんま 菅蒲湯 ちまきいんま
ちやね根合 水き根
あまふれおれへちるると
ありし道ふ様老とあり。
こやこの文室も海中の
龍文陣くと何やーまれ
庭の松とりろく沖の
藻よあがひ井のうられ
極と大海とあり。ちろく
川も大井川と何びき
浪浪と地よらんとやうふ
その波も形をひかえくと
あふんぐへられおもわん

永ふねとひくくらぐへあ乃
 うんらも東乃ゆ海もさ
 やちたらとぎいあふりてん
 新のともわりのよきらり
 ねほりこそそけいへん
 にから乃ゆ月。らまきこぬ
 らさる家これ茶例。うす
 だまやちやめあんうつ
 けりまりる人こ乃けこひ
 去やうぬ刀や小毛刀こそ
 取地よまうぬる麻者乃
 氣又あどとへん
 小きそゆら新のこれちやちま

心とらぬ地は又月暮まら水も花
 ありひくにもあはらぬきづり同
 わさちやあすぶあともぬれ水も
 せむとそきもあもんづきも元
 草蒲酢う橋の志にわたる水一葉
 へも又はのびわれあき小葉
 昔ハ一糸たえ乃小南より。
 左右れ近衛乃る場わつて
 三日よりと六日あてあつて
 はぐひやあてつがひとそてる
 にたる事ゆつとそらこハ
 如き花のくくへるむわり何
 ころく朔日ついでに一りそあへ。

又日おあこしれ競るりか
 親と将泰乃こまの極る
 りうへしてあまのこひひん
 やーゆー。それうこれらふ
 は九進乃まてはひとや
 きこ一申

加方あし極るまきわたり久
 賀茂まてるこあぬも
 かちこりりれく

今に夢ごまを世の
 将泰あそぬ子にふけい
 堂 とあるほは秋 意の堂

接子ふこころと
 乃らひよとせ車ゆりり
 とびうこれと空が久こあ
 きたのひあ。日台れ山よ
 とふと様の鹿れ何うこに
 うくべいあり山よらあめく
 成瓶火うと何やこことら
 うこれ麻糸かたあうとも
 家物乃玉藻のやんりひ
 うり月うこれとありひゆる
 又月あういおとこ務をも
 へ園うは志りをかりあふ
 依んかふあをこよ火とあに

と樟膠セキと川カハの漱中
乃やいとよやともひに
早ハヤともとあつてすづる
りー水ミヅびヒ早ハヤなナまマも

きこし申

高野山タカノヤマ言コトれやヤ庭ニワもひヒるル水
かうカウびヒもモちチ海ウミもモひヒるルとト水
あアぞゾこコとトとトとトやヤ堂ドウれレミミのノ郷
あアらラにニひヒれレとトするス堂ドウうウか
はハれレ火ヒいイまマ藤フジのノあアれレ老ラウりリ介
文字モンジはハれレ庭ニワさサがガらラのノ堂ドウれ
堂ドウ火ヒのノ漱セキ中チュウれレおオつツとト火
流ナギしシぬヌやヤらラれレ堂ドウ火ヒるルとト火

か友カトモとトとトあアらラくク探サツれレよ

堂ドウとトりリてテ浄ジヨウ家カもモ

あアらラらラひヒとト

是コトとト又マタ金カネをヲとトたタ庭ニワにニ堂ドウ

とトくクすスるル人ヒトれレとトとト

堂ドウ火ヒのノこコびビがガれレ老ラウりリ同

月ツキ乃ノあアらラ庭ニワやヤあアらラとト堂ドウ同

堂ドウ火ヒやヤもモ庭ニワとトそソにニ月ツキ乃ノうウ奇キ業ギョウ

あアらラらラ浦ウラりリ飯イらラ

つツとトけケらラ時トキ

あアらラらラとトとトとト堂ドウれレ一イチ家カ

二ニ舟フネもモくクるル山ヤマへヘあアらラて

竹タケのノ時トキ

えあふぬ沈のちるぬわの海豊

教 杖柱かひ 争り火 ぐや

からきり 教

般柱といひて八雲と雲花乃

濕りもらちやんとも

涼風のうきことさんせも

りひ。又山星れかひ乃煙り。

教乃よりかきとまわり。ある

やれ彩の縁の糸より。教乃

も子やとくへかきき。棒

あり雲れ変化てあれる

とくやんせつらき橋

乃下あるときうかてい

教教とて森乃陰竹の林

乃りかきくこうらき物

まら海よりあふりく

んんんともとん

夕風かうらつるてかの水

さうりやうらぬ風も水

教の珍をかありはく紙地水

教にもくぬるぬの旗水

かの色は四丁方れむき水

か友とととて探取り

教ととりて

まらあにびしむ教ぬらう運

物乃葉かきぬぬの教地水

山井二 十九
般^{ちり}魚^りを^ら火^り風^りの^つく^又新^りお^同

鶺鴒 鶺鴒川 鶺鴒舟 うみん
鶺鴒^いふ^さひ^さひ^の火^の大^井川

いさ川

さつきやまの夜がりに出。
月をぬすもどりのはるる
き又鶺鴒ははるる鳥のどん
るることつと鶺鴒乃目磨れ
目のこごりききたとへあご
ととり鶺鴒へ

いさ川や鶺鴒の地獄の火もた

水鶺鴒 ことえ

いとくせと産とをきくく
やうにあくもるれいあ
あもにわきくくくあ鶺鴒
とあこゆる備踏新りハ
うむひつときとらう
ふああやうあもいひあ
そのうたにうきつえま
くいあとも
とあもたにうきつえま

鹿子

きく物もあやういさつと
うきつえまのうきつえま

あつたつとらんそをとい
ふりり来うたこは戸うの
こあつたつひらりゆひ
あつたつ物のえんいひる
作らうるつる

夕靄 夕靄のやまはたれこ
やまはたれこ猫の志はなや
あつたつとらんそをといはの備

夕靄 夕靄

あつたつとらんそをといひらり
せねといひあつたつとらんそ
あつたつとらんそをといはの備

あつたつとらんそをといひらり
あつたつとらんそをといはの備
あつたつとらんそをといはの備
あつたつとらんそをといはの備
あつたつとらんそをといはの備

あつたつとらんそをといひらり
あつたつとらんそをといはの備
あつたつとらんそをといはの備
あつたつとらんそをといはの備
あつたつとらんそをといはの備

夕の影は涼さぞりそらる

山井 廿一
るりのえんきとやうく
めく海ハ扇車外とくも鳴門
や落月月のあともつ
ぬ河あゝぬ霜氷り見
あいで野山海川乃う
きとと

すじはくしまるるも氷
月影のまぎあけ川流るれ
月乃揚れあつる扇くる海うか
なれ氷あるとも落月外氷
夏のあけあつるくぐりや浦

氷室

いじろち むじろやう
ひのかれ

ひうー額田乃にやいきこ。
團雞とりよあよ特ー給
きるに空申りー氷室の
ああるとんはあてやうて
帝人そ氷をなれあひー
あり。團こあろりー氷室を
とられて熱月よ月ひあう
まーける。是ひじろあ
御洞の権與とくやうり。
いゆをあたるるうりーあ。
こおしき初日へきこら
のを氷りあそへてい
ひよ地ーゆるらまは

氷りしをかきこらひ。
夕ふ八氷りしをらいつか
なるともつり又正月乃
かまどいのかの翔とと給
いふもるも何あり。

東門松より立花の
ふしに水布らし給書
お家も神や氣向乃む板を
嘉定

嘉定 からきりせた

こかゆきし十六日ま松裏
とらしめをぬりしり
嘉定の合の物せうのあのゆと

あり。あもりうりあもれあり
ふしは嘉定も續として
十六文のりやれあり
すきくく乃くぶ物あり
とらへて人あもらとらめ
らうくもらひぬ

こかつきろ十六夜月ま給
なりりされん

月もこらひしあも嘉定合を
松

交れせしうせしせこれ羽
せしとあ 雲
松

経よりひ撃乃松よりいされ
何まらひらくや松おこら

ともしいひあし樹上乃吹
の夢のあふあふとんとく
まじん。あふあふとんとく
れせとあふもつり。ねん
あ乃翁のふとんとくあふ。
えん乃屋敷りもあふ。
又松の音を表して。磬石
御書るとりやもつり
えん乃あふあふあふあふ
むの中であふあふあふあふ
かふ衣せも掛あや二橋の松
らむせも屋あふあふあふ

石竹 しのり

麻夏

撫子 やましあふこかまこ
はあふあふこ

とこあふの麻より人い麻と
あわるとととよあれハ能消
あもわりあらとせよ花鳥
あともつり。又とこあつり
やともつりひつりあつり
お鬼よそへてあふもあふ
あふあふあふあふあふ
らあふあふあふあふあふ

風が吹くらんらん白く多きや
草風あやまき^{うき}あやまき^{うき}あやまき^{うき}

夕立

あらしをいふはら
いさひり

ゆふぐらふ太刀にひひりて
こぶれあきさぐえちんき
きり相きあやのわり就あ
ととひひ。又するかこま
音に方れけとらうら
ゆふぐらふ太刀にひひりて
氣ああとしひひあし。
ことりれえも^{あつ}い^まも
星^{ほし}とほりくるをれえと

うふりびあききききききき
ととあききききききき
あがり日くとも。い日こ志
きりあききききききき
夕ぐら風あききききききき
あらしをいふはら
作とりり

ゆふぐらふ太刀にひひりて
ゆふぐら風あききききききき
せきききききききききき
夕まがききききききききき

納涼

あらしをいふはら
いさひり

これづき乃ほちとさげ。
身とこふ心ちして。あが
ゆへ何せある。漱中一と濁と
なり比知ひ。石巻下り水と
きくへ石巻よ病をさく
あて。涼しさをあねえ
きくしき。氣ありりりり
ひて薬山よ陰城ととめ
て。風をさのんぬ。紙りま
りひ乃冷食して暑さを
とよめ。さくしあひこ乃落
服り。炎天をくれく
何りさ海あすとすく

少のうとへねぬ夏乃何さや
何せあわつさりり湯の海
澆つがさあらんもあつす。三休甫
扇 かきわり 末彦 舞扇 修羅扇
扇きりひく拍子 執敷 水鏡堂
扇 あつらえ

かえんにくがしてハ二月の
雪ふしとる。手にあらし
てハ何修羅がさくさる月に
あふんたがすべしとら
まふんた又わりのあはれ

えんどもあ〜〜かやうにうけ
後やうれ志あうはあつ。
廟うらふ乃作さあやうの
似行〜

風とあやひきうにひく廟
後^{かん}まのせであうのあやう
月教とまにもおきあやあ〜廟
はうらう廟やあや一^{あき}子とり
骨^ことりわくらあけ何廟三うり
らけつ^つあきあ^あの地がなり武
板 三みつぎが〜 夜〜
又〜 ぶ〜 志板

三三き川 茅の端 何さの系

浄手洗

右い^{えん}安^ん〜〜く^く々^々来^来権^権門
よ^よあ^あ〜[〜]ら^らと^とせ^せと^と乃^乃む^むん
〜[〜]ぶ^ぶき^き〜[〜]あ^あ〜[〜]り
〜[〜]あ^あつ^つき^きい^いね^ねあ^あ〜[〜]い^いたり
ゆ〜と^とあ^あ〜[〜]い^いま^まあ^あら^らも^もは^はこ
〜[〜]り^りれ^れ目^目あ^あ〜[〜]乃^乃あ^あや
あ^あ〜[〜]風^風や^やあ^あ〜[〜]び^びを^を神^神よ
〜[〜]ひ^ひけ^け〜[〜]こ^こも^もら^らが^が〜[〜]か
〜[〜]も^もや^やせ^せ〜[〜]乃^乃ん^んす^す〜[〜]も
〜[〜]乃^乃れ^れ廟^廟の^の食^食之^之神^神次
〜[〜]ひ^ひす^す〜[〜]乃^乃ん^ん〜[〜]あ
い^い〜[〜]乃^乃〜[〜]や^や〜[〜]乃^乃〜[〜]乃^乃

乃ありしともなむらへ
あどいり

一もやうなれつまはるん

せれあてなりのほりやみうき

何れの日う頭づ陀づ袋づちわんくへた高

